

ウィズコロナ時代の受講者の個別ニーズに対応した 教材の再構築に関する考察

～教育総論を事例として～

The Consideration of the Teaching Materials Restructuring Based on Individual Student Needs during a New Normal of Living with Covid-19
— A Case Study of Principles of Education as an Example —

浅田 豊

Yutaka ASADA

青森中央短期大学非常勤講師, 青森県立保健大学健康科学部栄養学科准教授

Aomori Chuo Junior College Aomori University of Health and Welfare

Key words : 教材づくり、個別的ニーズ、教育総論

1) はじめに

ウィズコロナ時代において、対面を中心としつつ学修機会の十分な確保と、感染対策の徹底が求められる中で、教育総論を担当する教員として、教材の再構築を行う必要性を認識し、コロナ禍3年目の活動時期を迎えた。ティーチングポートフォリオの改良を通じた、教育総論の教授学習過程や教材の最適化の試みを続けてきたが、最も重要な教員側の準備の一つが、受講者の個別的ニーズに応じた、幅広い視野の上に立った教材の再構築であることが明らかになってきた。そこで本稿では、ウィズコロナ時代であるからこそ生じるであろう、受講者の個別的ニーズを体系化させ、そのことをもとに、実際の場面で有効に作用すべき対応方策を明らかにすることを目的とする。

2) 教育総論における個別的ニーズと教材づくり

教育総論の講義内容に関連するニーズとしては、用語や概念の難しさへの支援、すなわち教育を成立させる要素の関係について、教育の本質に立ち戻って考察することや、学習そのもの及び子どもに関わる思想の理解、教育の歴史・制度の変遷についての理解の手助けになるような、教材・副教材の提供を受け、適切な支援のもと、効果的な解説を受けたいというニーズが考えられる。また今日の社会における教育課題である、チーム学校を含めた地域と学校との連携にあり方、学校安全の必要性をはじめとする、現代の教育政策の動向への関心を喚起させる教材の工夫を、受講者として期待されると考えられる。したがって、短期大学の教職コースにおける講義に関する教材は、授業時間単独で存在するとは考えにくいいため、予習復習や調べ学習、レポート課題、受講者同士のディスカッションといった自己学習・協同学習との接続の上での、教材の体系化が不可欠である(表1～4参照)。つ

まり、個々の学生の学習の計画段階である、学生自らが計画の立て方を考え、計画や準備を推進し、学習の習慣づけを継続する際に、教材には用語や概念を丁寧にわかりやすく解説する部分が存在することが不可欠である。さらにその教材を通じて、教育総論に関して具体的に何を習得してほしいかや、その教材を理解・活用することが今後どのような教育的意義を持つのかということが、学生に段階的に的確に伝わるような、教材内の領域配列の工夫が求められる。

3) 教育総論における学び合いの際の個別的ニーズと教材づくり

教育総論においては受講者同士の学び合いの場面があるが、その段階に至る基礎として重要な点は、個々人が自身の学びを省察することである。つまり教員側には、個別の学生の進捗を踏まえ、すなわちノートづくりやラーニング・ポートフォリオづくりへ適切に配慮をしながら、各学生が資料を効果的に読みこなしているか、自分の考えを導出できているか等を確認するための、いくつかの小問を資料に接続する工夫が求められる。さらに、学んだことを深化させ、学び方そのものを30時間の中で適宜改良していくことも、受講者のニーズ・課題であることから、各学生の習熟、知識の運用、新たな調べ学習への着手、分析の実行、自分の新しい考えの創造、という各学習段階に応じて、教材を補助的・段階的に組み上げ、教育総論に関して学修の自律的取り組みを実行できるよう、手助けすることが担当教員に期待される。自律的学修が実現すれば、学生間の学習成果の共有や分からない箇所
の教員への質問、教材の問いに対して学生自らが自分の問いを立てるという活動が可能となろう。その際には、教員は丁寧に解説を行うことや答弁をすること、学生の発想・着眼点を認めつつ、その学生の見方・考え方をさらに伸ばし発展させていくことに、十分な時間を確保できるように教授学習過程を見直していくことが、一層教材活用を生かすことにつながる。

4) ニーズ生成の背景となる心理社会的事象

ウィズコロナ時代に入り3年間に適宜、必要に応じて各大学において開発や試行が行われたであろう事項としては、受講者と教員が空間と時間を共有するリアルタイム配信としてのハイブリッド型の授業、音声説明付きのパワーポイントファイルや板書を中心とした動画であるオンデマンド型の授業、三密の全てを回避する対処を施して感染リスクを排除したうえで適切に行われる対面授業などが考えられる。

ここで、ハイブリッド型の特性からは、プレゼンテーション権限の委譲やチャット内容の共有を手段として、受講者間の議論の深化へと進みやすい環境を、教員として作り上げておくことが期待される。またハイブリッド型のうち対面学生同士であれば、授業中に発せられる問いに対して分からないことを近くの学生へ訊き、手短に解決することができるが、リモートの学生同士であれば、デバイスを2つ以上つなげていなければ、資料を見ながら訊きあうことは不可能であることから、予めつまずきや壁を予測して、教員から早め早めに補足することが求められる。さらにリモートの学生間でのグループワークでは、ブレイクルームで、ランダムでのグループ分け機能があることから、普段あまり対話をしない学生とも議論ができることから有効であると感じる学生が多いと推察できる。よって、対面の学生に対しても、グループ分けをランダムにしたり、着席の際に学籍番号を基にするなどの工夫が教員側へ求められる。

次にオンデマンド型の特性からは、ノートやメモの取りやすさ、質問のしやすさという視点への接続が不可欠である。また課題が多すぎるという事態にならないように配慮が求められる。さらに90分

がひと続きになった動画よりは、20分の動画を4本の編成とし、各コマに小テストを接続させるとともに、最後の10分間で総括をするという編成の仕方の一つの参考事例として考えられる。

5) おわりに

平常時においても、ウィズコロナ時代であっても、それがアフターコロナ時代に移行した場合でも、教育環境を最適化し、質・量ともに有効かつ最善の教材づくりと、受講学生のニーズ・レディネスとを、きめ細やかに照らし合わせる中で、適切な教授・学習過程を実現することは、教職コースの中の教育総論を担当する教員としての基本的な任務である。即ち、適度な緊張感の下、リモートであっても対面であっても、受講者間の質疑応答や議論を通じた学び合いの機会を充実させることができるような、主体的参加意識や協働の精神、仲間づくりにも適宜配慮をすることも、講義運営には教材づくりに加えて不可欠である。今後も引き続き、概念や要点が理解しやすく、習慣的な考察や継続的調べ学習に、体系的に接続された、教材の再構築や学習過程での協同の促進につながる、教材に関する研究を深めていきたいと考える。

6) 文献

- ① 文部科学省『大学等における令和4年前期の授業の実施方針等に関する調査及び学生の修学状況（中退・休学）等に関する調査の結果について』2022年。
- ② 文部科学省『令和4年度の大学等における学修者本位の授業の実施と新型コロナウイルス感染症への対策の徹底等に係る留意事項について』2022年。
- ③ 文部科学省『学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係るQ & A等の送付について』2021年。

表1 予習時における教材の再構築に関する指針

	考えられるニーズ	背景	対応方策
知識・技能	資料の該当頁を熟読するという指示に加え、予習復習と授業中の解説、課題への取り組みをあらかじめ体系化させ学生に提示してほしいとする潜在的ニーズ。	予習復習、自己学習をコマ単位でシラバスへ提示することは今日通常の流れであるが、形骸化させないためには、一人ひとり異なる、個別の学生の知識や技術の習得過程への十分な配慮が求められる。	資料を説明することに加え、分からない点を列挙しよう、文献リストにあたり焦点を絞って調べよう、既習事項と結び付けて理解しよう、生活や実社会とつなげて考えようといった具体的な指示を出す。

思考・判断・表現	調べた内容に考察を加え、発表する当番がある場合は、模範例と改善例を知りたい。	コロナ禍で発表機会そのものの量・質に変化があることから、要点をどのようにおさえ、どのような観点を満たすまとめ方・伝え方がよいのか、という点の切磋琢磨の機会に変化がみられる。	ルーブリックを予め作成し、全学生へ示し、質問を受け付け、必要な解説を加えた後に、調べ学習や発表を行わせる。
関心・意欲・態度	アクティブ・ラーニングを取り入れる場合は、ペア学習などを苦手にする学生もいることから、進め方そのものを教えてほしい。	コロナ禍に入り、交流そのものが正規課程内、課外活動中ともに、質・量に変化してきていることから、学生の状況に合った支援が必要である。	対面の場合は机間支援を適宜行うとともに、リモートの場合は能動学習・協同学習を伴うオンライン学習の意義や手順、工夫、留意点を詳しく提示していく。

表2 授業中の解説場面における教材の再構築に関する指針

	考えられるニーズ	背景	対応方策
知識・技能	一斉講義を90分間続ける場合には、練習問題や小テストを含む双方向の対話場면을教員へ期待している。	卒業に必要な科目や自由選択科目、資格取得に必要な科目などの構造や、学生自身が描く進路など、個々に異なる背景に関しいずれの場合でも受講者を満足させて、一定の目標に到達させるために、教材の工夫・再構築が求められる。	各学生の学び方そのものを各自が改良していくことを支援することで、メタ認知の力や方法知を高めつつ、系統的・問題解決的アプローチのみではなく、適宜範例学習やプログラム学習、有意味学習を組み込み、内容知を高める。

<p>思 考 ・ 判 断 ・ 表 現</p>	<p>教員からの解説、自分の経験や知識を踏まえた考え、受講他者の考えとの比較、自分の疑問がどのように解決されたか、新たに調べたい事項を記録し、省察したいというニーズを持つ。</p>	<p>受講集団の中で、学習ニーズとして、距離を取り短時間での口頭でのディスカッションが有効と考える小集団と、感染防止対策から声を発することなく、模造紙や付箋を活用した紙上の議論を求める小集団に分かれる場合が考えられる。</p>	<p>両集団の意向を踏まえ、思考を深め表現につなげる際に、自分の意見や他者への質問は付箋へ、それらを受けた自分の気づきを大判シートへ、それらを集約し体系的に整理した内容を模造紙へという段階的手順で提示を促進することが考えられる。</p>
<p>関 心 ・ 意 欲 ・ 態 度</p>	<p>オンデマンド学習時は、円滑有効に理解を進展させ、深化と効率の両方を満たす学習を推進するために、音声付 PPT スライドや PDF 資料を含む、個別性に応じた教材を必要としている。</p>	<p>感染状況などから対面授業を欠席した学生向けのオンデマンド動画では、教員との質疑応答の接続は可能であるが、非同期とならざるを得ないことから、オンデマンド視聴時は一層、学生の自律度と動機付け、自己観察の力が求められる。</p>	<p>対面授業中の問いの発出、自身の考えの導出、周囲との考えの共有、解説、総括というプロセスを補うために、オンデマンド動画中では、問いそのものを自由に、少なくとも一つは受講者自身が考え出し、それに対し解答を考えるとといった、自己との対話場面の設置が有効である。</p>

表3 協同学習場面における教材の再構築に関する指針

	考えられるニーズ	背景	対応方策
知識・技能	チャットと音声混在中では、小グループでのディスカッションの進行に時間を要するため、何らかの支援を必要とする。	カメラやマイクのオンオフ、チャットのみ希望など、通信環境等から、オンライン時の各学生の希望が多様化している。	授業参加時の細かな希望を事前に把握し、グループ分けに反映させる。
思考・判断・表現	質疑応答や議論の中で新たな問いを立てて議論をさせたいが、円滑に進まない時がある。	前提となる理論、知識の習得支援が十分ではない。または受講者間で差が生じている可能性がある。	ブレイクルームに分かれた場合に適宜巡回し、助言を行う。あるいは対面時の筆談中に筆談シートをもとに補足を行う。
関心・意欲・態度	グループ協議や筆談時の模造紙を用いた作業の際に、司会や記録の促進等の役割分担の仕方についてのガイドを必要としている。	オンライン時のグループ協議の経験や、協同学習において教育上の支援を受け経験に関し、受講者間で差異が生じている。	平常時の、または感染状況を踏まえた通学時のグループ協議や発表を十分に経験している学年、経験が少ない学年に分けた支援が求められる。役割の違い、実際の進め方、留意点などの手引きをもとに、個々に異なる「困っている点」に応じた助言が必要である。

表4 復習・レポート課題作成場面における教材の再構築に関する指針

	考えられるニーズ	背景	対応方策
知識・技能	過度な負担とならない範囲で、各コマへの理解度や達成を向上させるための復習に取り組みたい。	リモート時は学生から教員への質問は難しい、または対面時に授業前後の時間を用いた質疑応答が十分にできない場合は、各学生の理解度や達成状況を形成的に把握し、webを介した質問体制や教材の調節に反映させる必要がある。	予習や授業中の解説、質疑応答、調べ学習、発表、復習、レポート課題が一連の不可分なものとして統合される中で、教材を段階的に構成し適切に提供できる体制をとることが考えられる。
思考・判断・表現	リモート時であれば、通信インシデントに巻き込まれることなく適時、資料を入手し思考につなげたい、対面時では資料のポイントを解説した上で活用方法を助言してほしいというニーズがある。	思考を深めるための学習資源の確保面について、コロナ禍では、通常の文献に加え、電子書籍やPDF化された資料を含め、適時に活用できる環境が求められている。	復習時に、学生による用語の確認や記憶の体系化等の作業に加え、教員が手助けにより工夫できる点として、多様な資源を用い講義内容を学生自らで発展的に捉える、また事例による補足を試みることを可能にするような教材が求められる。
関心・意欲・態度	各自の学習の進捗や困難に思っている点を教員が適切に把握するとともに、教育の思想や歴史等に関しその主題を身近に感じながら学習を推進することが難しい内容がある場合は、レポート課題推進上の適切な手助けが求められる。	15コマ30時間を通じて集中力を低減させるとなく、意欲や主体性を保持して取り組むことができるように、レポートに関しては個別にフィードバックを行うことが一層求められる。	ラーニング・ポートフォリオを各学生が自発的に管理できるように、模範例を教員が示しながら、省察と復習、レポートを含めて、学生が自ら振り返り、自己観察ができる環境づくりが求められる。